

日本語を模倣する風潮には極めて反対であった。しかし、無意識的に「詩界革命」の影響を受けたことも否めない。黄節・陳去病・諸宗元・呉梅・胡樸安・柳詒子などがそれである。ただ柳詒子は、梁啓超たちの影響を受けること深く、かつ旧派の詩人たちに反対であったという点において異なるところがある。この人々は辛亥革命以後、多くは古典研究に没頭し、それはそれとして見るべき業績を収めたのであるが、現代文学から言えば、学衡派の詩人たちに影響を持ち、また呉梅のように、新詩人に「詞曲から新詩へ」の道を示した程度に止まったのである。

一方、同じく「清朝打倒」を叫んだが、民主革命の思想の抱懷者であり、世界的革新的であって、過去よりは未来へ、近代国家の建設を理想とし、新しい社会の実現に熱情を傾けた同人たちがいた。馬君武・蘇曼殊・呉虞・林庚白などがそれであり、高天梅の如きもこれに属せしめることができよう。彼等の多くは外国に留学あるいは居住したことがあり、外国文化に対する認識も比較的深く、新思想の熱心な吸収者であった。したがって、積極的消極的の差はあるにしても、實質的に「詩界革命」の道を推進したのである。殊に馬君武・蘇曼殊たちは西洋詩歌を翻譯し、中国詩壇に新奇な空氣を導入した。それは林琴南の翻譯小説ほど影響が大きかったとは言いがたいが、詩歌革新の上に寄与するところが大きく、現代詩生誕の一つの動力となったとも言

木門の唐明詩鼓吹論

一 詩壇に於ける木門の活躍

元禄・宝永・正徳・享保の詩文壇に於ける木門の活躍は目覚まし

えよう。

かつて魯迅は「革命を希望する文人が、革命一たび到るや、かえって沈黙して行った例」として南社をあげ、「民国成立以後、倒寂然無声了。」^(一)と言ひ、「我想、這是因為他們的理想、是在革命以後、『重見漢官威儀、峨冠博帶。而事實並不這樣、所以反而索然無味、不想執筆了。』」^(二)と講じたが、南社同人の中、前者に対してはこう評することができても、後者に対してこの論は当たらないであろう。馬君武が「赫克爾一元哲學」を、蘇曼殊が「碎簪記」を、呉虞が「家族制度為專制之根柢論」など多くの論文を、「新青年」に發表したところによつても、すべてが「寂然無声」となつたとは言えないであらう。

なお、この魯迅の講演は、当時創造社の同人たちが盛んに提唱してゐた、「革命文学」に対する批判を中心としてなされたものであり、学衡派の詩人呉芳吉も、「激刺之文学、在前清末葉、固已有人行之。其成功為滿清一姓之推轂、而其罪惡則在全国人心之迷乱。」^(三)（吳白屋先生十、雜稿二、再論書）と論じてゐる。論旨もとより異なるけれども、創造社の前車的存在として南社を考えたことは相似てゐる。今、これらの論の当否を問題としてゐるのではなく、そこにも南社文学と現代文学との一つの連関が考えられる、ということを一言して置きたいのである。

(一九五五、一、一二)

松下 忠

い。蘆社の服部南郭は、「錦里先生、実為文運嚆矢。」^(四)（先哲叢談卷）と認め、友野霞舟は「延至元禄享保、作者林立。就中木門蘆社之徒最

盛。」(樂府詩)と云ふ、西島蘭溪は「順庵徂徠二先生勃興、海内詩風一變。」(詩上卷)と云つてゐる。

当時の詩壇の大勢を考察する材料は色々あるが、先ず韓使來聘の際日本を代表して接觸した學者文人と、韓使との唱和集によつて考察してみよう。元禄に先立つ五年前天和二年の「和韓唱酬集」(卷七)によると、韓使と唱酬したものは儒僞合せて三十九名に上るが、韓使を敬服せしめた日本の文人は、林鶴峰の門下と木下順庵その子菊潭と柳川震沢その嗣子向井滄洲とであつた。中でも聘使中の學士成翠虛や李鵬溟等が語を尽して推賞したのは順庵・菊潭父子・震沢である。その後三十年正徳元年の「鷄林唱和集」(卷十五)によると、韓使を接待した人々は當代一流の儒曹であり、その数は百二十名に及んだ。この中で最も華やかに唱和したのは林鳳岡の門下と木門・仁齋門であり、木門では菊潭・三宅觀瀾・室鳩巢・服部寛齋・祇園南海・雨森芳洲・松浦霞沼・土肥霞洲(白石門)・青地浚新齋(鳩巢門)が活躍している。而も白石はこの時筑後守に任ぜられて接衝の主役に任じたのであつた。その後七年享保四年の「桑韓唱和集」(卷十)によると、唱和した儒・医・僧・士は四十五名に及び、その主なものは徂徠の門下である。

次に私的なものとして江村北海の「日本詩選」(正篇十卷)によつて考察してみよう。本書は元和以来安永に至る詩壇を網羅しているが、採録の詩人五百二十名中最も多く多くの詩篇を選ばれている上位十五名の中には、木門が四名(白石・南海・鳩巢・上柳四明(向井滄洲門))と護社が三名を占めている。しかも北海は木門の白石・南海と護社の服部南郭を梁田鯨巖と併せて、元和以後に於ける邦詩の雄としている。(日本詩史卷四)北海の撰集態度については省略するが、私は北海の選は當を得たものと認めている。

以上は数量的な比較に偏してはいるが、木門護社を除いては當時の詩壇を論じ得ない事を示唆しているものと云えよう。

二、木門と護社

護園古文辞派の詩論に先行するものとして木門の詩論がある。私の観る所、兩派の詩論は色々の点对立していると思う。兩派とも唐明詩を鼓吹しているが、一般に木門は唐詩を、護社は明詩を強調して主張したと考えられている。そればかりではない。木門には反古文辞説が多いのに対して、護社は古文辞説である。又經學と詩文に対する主体の問題から論じて、木門は經主詩從(仮称)、護社は經詩兼修(仮称)と考えられるし、詩論に於ける勸善懲惡説と反勸懲説でも、順庵は前者であり徂徠は後者である。しかし本稿では紙面の制約上木門の唐明詩鼓吹論についてのみ論述する。

三 木門の唐詩鼓吹

日本近世詩論史上、唐詩鼓吹は木門の主張でありかつ木門が主流である。しかし木門の全体がこの主張のみでなかつた事は、後述木門の明詩鼓吹によつて証明できる。私が木門を唐詩鼓吹と明詩鼓吹の二つに分けて述べるのもこのためである。思うに木門の祖順庵の學風は固陋偏狹ではなく、徂徠の學風と共に當時にあっては頗る進歩的であつたために、門下生には各方面の大家——經濟家としての鳩巢、折衷學・律學の開拓者としての榊原篁洲、典札家史學者としての白石、詩壇に南海・南部南山、外交の衝に芳洲・霞沼——等が輩出したと同じように、詩論に於ても唐詩鼓吹だけではなかつた。木門の唐詩鼓吹は順庵・白石・鳩巢・芳洲等によつて代表される。

順庵が唐詩を鼓吹した事は、他學派の徂徠や南郭も之を認め、徂徠は「錦里先生者出、而搏桑之詩皆唐矣。」(先哲叢書)と云い、南郭は「雖其詩不工、首唱唐。」(同)と云っている。順庵の著書として「錦里文集」の外には目ぼしいものがないので、その詩説を仔細に研究することは困難であるが、唐詩の中でも絶句を貴び、律詩や雜體長篇の比にあらずとした。曰く、

「詩之於絶句、易而難、難而易。自其易而言之、字句不_レ多、情思易_レ通。故初學小生亦能言_レ之。自其難而言_レ之、以_レ無窮之思、寓_レ于二十八字之間。詞調流麗、興趣含蓄、寫_レ意外之妙。非若_レ五七言律、爭_レ奇於對偶、雜體長篇、演_レ思於數十百言之比_上也。」(錦里文集、卷之四、鴻巢集)

白石は門弟中で最もよく師説を守った人と云われている。例えば深谷公軒など「方今如_レ白石先生・鴻巢老人・柳原篁洲・祇園正卿・雨森伯陽、共同_レ師。而不_レ犯_レ所云之法_上者、唯白石一人而已。」(非_レ駁斥)とまで評しているから、木門の代表者としては蓋し第一人者であろう。白石は「詩ハ近來ハ唐詩ヲカラモ朝鮮モコナタモ同ジク學ビ候。」(白石先生傳詩)といひ、又「詩ハ性情ヲ述候モノニ候。平生ニ胸中ニ唐詩ミチミチ候テ有_レ之候得バ、ソノ性情ノ流レ出候時ニ、カノ胸中ノ唐詩ノ中ヲ通り候テ出候間、イゾコトモナク唐詩ノ風味有_レ之モノニ候。」(同上)といひ、徹底して唐詩を鼓吹している。白石が鴻巢の詩を評したものに「室新詩評」があるが、これは全く唐詩を鼓吹した格調派の論評である。

(後述)白石が唐詩を善くした事は同門の鴻巢も(朝散大夫筑後守新井源公碑銘)古注学の龍草廬も(白石先生詩絶序)之を認めている。鴻巢は中国歴代の詩壇を品評して、「三百篇はとこう議するに及ばず。漢魏以後の詩も文理悠暢意志淵永にして風雅の趣を失わざりしなり。……しかるに六朝に至りて綺靡をきそひ浮華をつとめしかば風雅の体はほろびにたり。唐興りて李杜王孟が徒いでて六朝の余習を一洗し大いに古風を振興せしより、今に至りて詩を手習ふ人は唐詩を学びざるはなし。……中唐より晩唐に至りて韋蘇州柳儀曹が外は昌黎が文章古今に卓絶すといへども其詩風雅には少し遠ざかりき。」(駿台雜誌卷五、詩文の評論)と云い、三百篇を理想とし、漢魏盛唐の順に推称して中晩唐以下は衰えた云った。鴻巢の唐詩鼓吹は正確に云へば盛唐鼓吹であるが、総じて云う場合には、「今世好で詩を賦する人を見るに、多くは日頃唐詩をく

はしくよまずして云々、」(同上)とか「是にて唐詩の妙をしるべし云々、」(同上)と論じ唐詩鼓吹の意を表している。江村北海は近世詩人中最も詩の品評をよくした詩人であるが、鴻巢を唐詩鼓吹者としている(日本詩史卷之四、鴻巢集)のは適評である。

芳洲は橋窓茶話を著して「故予晩年案頭所_レ置、以_レ陶淵明_上為_レ首、李杜為_レ第二、韓白為_レ第三、蘇東坡為_レ二之下三之上。優_レ游吟吟於其間。」(中)と云い、多くの唐の詩集を愛読しているが、一つの明の詩集をも愛読していないばかりか、明詩については「……若_レ夫明人之詩、譬如_レ腐妾妖姬、素無_レ天然之妙姿。」(同上)とし、李王については「如_レ朱明王李等家集、読也可、不_レ読也可。又從而言曰、不_レ如_レ不_レ読。」(同上)とまで排斥している。

四 木門(附蛻巖)の明詩鼓吹

木門の高弟中柳川震沢や白石や南海等は唐詩の外に明詩をも鼓吹している。

震沢は木門の高弟中最も早期の及門であるが、寛文の初に「嘉隆七才子詩集注解」を校定刊行し、延宝六年に「正統明詩選」を校刻したと引例して、徂徠の李王推称に先駆するものであると説いたのは岩橋蓬成氏(日本書)である。さて北海は震沢の嗣子たる向井滄洲の詩を評して「而今誦_レ滄洲詩、駿駿乎明人声口。」(日本詩史、卷之五、滄洲集)といっているから、父子共に明詩に意を用いていたといえよう。しかし私の観る所では、明かに明詩を鼓吹したのは白石と南海とである。

白石は既に述べたように徹底した唐詩鼓吹者であるが、その半面明詩の格調をも大いに認めている。「室新詩評」(白石全集第六卷所收)は唐詩に法る格調派の見地から鴻巢の詩を論評したものであるが、拗字格や声病に關して唐詩・宋詩・明詩に言及して曰く、「此事は唐詩には殊の外吟味候ひしと相見え候。而_レして多_レくは律に相叶申候。宋人に至り候て其律乱候。而_レして明人殊之外吟味つよしと相見え申候。」と云

い、宋詩を貶し明詩を推している。又「夫より後古人の詩を見申候に、唐初巻中に此格少く、中晩よりは時々相見え、宋に入候て多く相見え候へども、明の七子より以來は殊の外声律にも心を用候と相見え候べき」とも云っている。

南海は反古文辭論者ではあるが、明詩の価値については大いに認める所があった。詳しくは「諸橋博士古稀祝賀記念論文集」や「斯文第六号」の拙稿にあるが、南海の明詩鼓吹は、漢唐の詩を學習し理解する楷梯として明詩學習の必要を説くにあった。即ち「初読漢唐之詩、猶夢中聽鈞天樂。非不知其音之靈妙。但其茫然不能識靈妙之所在。不如先說明詩之易成功耳。」(明詩序) といひ、「明詩俚評」一卷を述作した。

(附言) 白石よりもやゝ後、南海や徂徠と同時代の明詩鼓吹者に梁田蛻巖がある。蛻巖の師承については未だ疑を存しているが、木門と最も密接な關係にある。菅原胤長は「錦里文集」の序文に於て順庵門とし、「近世漢學者大事典は白石門とし」(學統)、「先哲叢談」は白石が心を見して交つたとしてゐるからである。蛻巖の詩文論は諸家を併せて折衷したものである。この折衷的立場から左海竹田生に答えて、中國詩壇を論じ、初唐・盛唐・中唐・趙宋と共に明詩を鼓吹して、「明興りて段々盛に成りて、全く盛唐中唐を學べり。其の魁になるは李獻吉・何景明別して李于鱗・王元美の輩大家の才子又夥しく出たり。」(答問書)と云ひ、一方晩唐・宋末・元を斥けている。(同)又享保九年の「答樟井生」と云う文章では、「原來詩は初盛中三唐を正風とす。此の正風を心がけ候には、初心の不案内より、只管唐詩に熟すべし。」(同)と云ひ、更に「幸なる哉、明の大家李攀龍の選集せし唐詩選、詩學において、字字千金、至極の宝にて候。」(同)と云ひ、初盛中三唐を正風と稱し、李攀龍の唐詩選を推賞している。

五 詩論史上に於ける木門の地位

木門に於ける唐・明詩鼓吹の實際は如上の通りであるが、近世日本詩論史上如何なる地位を占めているのであろうか。私は木門の唐詩鼓吹は、藤原惺窩・林羅山・僧元政・石川丈山及び師松永尺五等の第一期詩壇を受けて、一時の崇尚を唐詩鼓吹に向わしめたものであり、一方の明詩鼓吹は、林羅山・那波活所等の流れを受け、更に次の護社の明詩鼓吹に先鞭をつけたものとして、その意義を重視するものである。以下兩者の意義について簡潔に述べてみたい。

イ 唐詩鼓吹の詩論史的意義

a 先行の人々との關係

木門の唐詩鼓吹に先行するものは、元和・寛永・寛文を中心とする第一期詩壇で、それを代表する人々のうち惺窩・尺五・羅山・元政・丈山の詩論を検討してみよう。

惺窩は「以時變、以人別者、突然也。所以為其好不好者、實不然。古今彼此豈有異哉。」(續惺窩文集卷三)と云ひ、詩には時勢の變と諸家の別があるから、特定の時代により又特定の人によって好不好を為すべきでないとの意見であった。この一時代を界画しない考え方は崇尚する詩人によつても伺われる。陶淵明の愛好は終始變らなかつたが、唐に於ては杜甫・白樂天、宋に於ては蘇東坡・黃山谷、明に於ては王陽明・丘濬(邱濬)等、どの時代にも亘つて推稱している。

羅山は中國詩壇の變遷について、「詩學盛於唐、理學盛於宋。然而宋詩猶差肩於唐。至于元明、而詩法萎蕪。……夫詩者以三百篇為規範。其次之者三閭大夫乎。浣花居士是其重也。」(羅山先生文集卷五)と云ひ、「唐一變至于漢魏乎。……漢魏雖幾變、不可不至於周也。」(同卷七)とも云ひ、周代の三百篇を理想とし、以下順に楚辭・漢魏・唐宋を推し元明に至つて萎蕪するという意見であり、唐・宋・明については後世の如く特に一時代を界画する見解は執らなかつたように解せられる。なお上記卷七の「示石川丈山」という文章は、寛永十九年詩仙堂

に貼する中国の詩人三十六人を選出して意見を述べたものであって、屈原・杜甫を最上の詩人として崇尚する口吻ではあるが、特に各時代に亘って選庭をつけてはいない。

元政も陶潜・杜甫・白楽天・寒山・拾得・東坡・袁中郎を愛好して（岬山集卷之十七）一時代と一詩人とを界画しない意見である。

然るに丈山のみは以上の三人と好尚を異にした。詩仙堂中に屈原以下唐宋に至る三十六詩仙の像を掲げて之を敬したにも拘らず、特に盛唐・中唐を理想とし、中国歴代の詩人の中では杜甫を第一人者と仰ぎ、一時代一詩人を崇尚して、「詩ハ難レ成モノニテ、中華ノ中ニモ工ニ於詩ニナルハ世ニ稀也。又於吾邦ニ乎。匪熟大曆之諸作、唯少陵妙工ハ孰能可レ窺其闢奥哉。」（詩法正義）と云い、「到三詩道之高妙至工ハ以三子美為古今第一。」（同上）と云っている。丈山の唐詩鼓吹については、同時代の人羅山も（羅山先生文集卷七）「石子復等も認め、子復に至っては丈山が唐詩を首倡したと（同上冊）」明言している位である。

順庵の師尺五は元政や丈山に先行する人である。その詩文について滝川昌榮は「昏友漢魏唐宋元明之豪俊」（尺五先生全集序）と評してはいるが、その全集を検すると丈山との交遊唱和が最も多いことや、詩文の作中に「共尋工部詠」（夜遊友人席）「賦唐詩詠和歌」（源光高公挽詞四）「旦入尺五堂、翺六經之芳苑、迴澗諸家之詩流、傾華咀英、得浣花之髓」（同卷之二、癸亥三月五日、依川先生集卷一、仲英、得浣花之髓）「（同卷之四、依川先生集卷一、仲英、得浣花之髓）」（春利菜鳴論語同賦詩序）などの詩句文章が散見することから、丈山の唐詩鼓吹論に近かったものと考ええる。

尺五や丈山を除く惺窩・羅山・元政は、或は唐或は宋或は明と一時代を界画しない人々であり、これは近世の草創期を代表する詩風であった。それが尺五や丈山を経て木門によって唐詩鼓吹を明確にし、或一時代を界画するに至ったものである。

b 同時代の人々との関係

木門と同時代に伊藤仁斎・東涯・貝原益軒等が詩文壇に名声を博していたのであったが、これ等の人々はどうかであつたらうか。

仁斎父子は詩文よりも寧ろ経術を主とする学者ではあつたが、父子共に李白・杜甫に最も推服していた。仁斎は「三百篇之後、唯漢魏之際、遺響尚存。厥後唯杜少陵氏之作為庶幾一矣。」（龍子問卷之下、）とて三百篇と漢魏の詩と杜甫を崇尚している。

東涯は「宋不及唐、唐讓漢魏、漢魏与三百篇、甚有選庭。」（紹述文集卷之十九、）とて、三百篇と漢魏と唐と宋との詩に夫々選庭を認めているが、それでも「今也承平百年、文運丕闡、杜詩始盛于世矣。」（杜律詩話序）と云い、「漢魏近古矣。至於唐、體製雖變、而趣猶古也。」（同卷之三、）後之學者莫不以為法在焉。」（同卷之四、唐）とも云い、唐詩を推す口吻が強い。

益軒は「三百篇は夫子之所刪定、為詩之經。万世學詩者、當以是為本。漢魏以降至盛唐、雖去古既遠而曰刪後無詩、然風雅之流猶未全亡。……中唐以來至宋、迨元明、其間作者不少、固雖極巧麗、然其風漸菲薄、不若及古雅也遠矣。不可以為宗師。」（慎思錄卷之五）と云い、三百篇を理想とし之に次ぐものを漢魏盛唐とし、中唐以降宋元明の詩は宗師と為すべからずと明言している。

このように検討を加えて来ると、木門と同時代に活躍した人々も亦、學問思想の対立を超えて唐詩主張の点では、木門とほぼ一致する傾向にあった。故に唐詩鼓吹は當時の時代色であつたと観てよい。然るに私が唐詩鼓吹の功績と意義を木門に認めるのは何故か。同じく唐詩を鼓吹しているとは云え、両者の文章表現についてよく注意すると、木門では積極明確に唐詩鼓吹を打出していると言ふ事が出来るが、仁斎・東涯・益軒等の主張は消極的で、唐詩の価値を認識したと云うのが適當だからである。

c 唐明詩鼓吹の交替期

順庵・白石・鳩巢・芳洲等木門の唐詩鼓吹者達は、元禄・宝永・正徳を中心とし享保に及んで活躍した。又仁斎の詩論は元禄六年に成った「童子問」より引用し、東涯の詩論は夫々享保四年・正徳三年・享保二年発表のものであり、益軒のは正徳四年脱稿の慎思録から引用したものであるから、木門を主流とする唐詩鼓吹論は元禄・宝永・正徳を中心とするもので、やがて護社の明詩鼓吹期へ移る時期である。徂徠の古文辞の首唱明詩の主張を羽翼した東野は、正徳元年来聘の朝鮮の叢書記に述懐して、「時有所著示諸人、不暇而地、必唾而罵。曰、子何從而得此于鱗之毒。」(東野遺稿卷下、再)と云っているが、これは木門の唐詩鼓吹の時代に護社の明詩鼓吹の困難性を示した一例と見られる。かの木門の南海や蛻巖の明詩鼓吹も正徳以後享保の初であつた事を考え併せて、唐詩と明詩の詩運の交替期は正徳の頃であつたと観て差支えなからう。

ロ 明詩鼓吹の詩論史的意義

a 羅山・活所の古文辞説を撰取

木門の明詩鼓吹は突如として起るものではない。木門の明詩鼓吹を促したものは何であらうか。それは順庵の師尺五と同門の羅山や活所の古文辞に関する所論であらう。

李王の古文辞を逸早く認識したのは、反古文辞の立場に立ったとは云え林羅山とせねばならない。羅山は徂徠に先立つ事七・八十年以前に李王に注目した。李王を去る五十年を出ない頃である。曰く

皇明北地李猷吉、濟南李于鱗、瑯琊王世貞、作文字、自以為古、而比周誥殷盤詰屈贅牙。其流汪道昆・葉石洞・王遵岩之徒、亦相從

而為之。余偶然莊年見之。」(羅山先生文集卷七十一、隨筆七)

羅山だけではない。同門の活所に至っては李滄溟を称揚して、「李滄溟著唐詩選。甚契余意。學詩者舍之何適。」(活所稿)と云い、李王一派の明の詩人の作を讀んで、「謝茂秦洞庭湖、徐子与・吳明卿岳陽樓作、氣象雄壯、与絶景相敵。殆可追步少陵・浩然二氏。」(同上)とも云っている。活所の事に論及したものは先に北海がある。北海は中国文学の我が國への伝播を論じて、概ね二百年後という説を主張した人であるが、その論旨から、「我元禄距明嘉靖、亦復二百年、則七子詩、当行於我國。氣運已符。故有先于徂徠已称揚七子者。」(日本詩史卷之四、物徂徠參)として活所と永田善斎とを挙げている。

b 護社の明詩鼓吹の先鞭

さて前述の北海は徂徠と同時に白石・滄浪・蛻巖・南海などの詩が明詩の声格であるとして、「迄徂徠時、其機已熟。白石・滄浪・蛻巖・南海、大抵与徂徠同時。並非買護園余勇、而其詩雖宗唐、亦唯明詩声格。」(同上)と論じている。この中の滄浪の詩論については私は北海説を認めないが、他の三名については私の見解と一致している。滄浪を認めない反論としては、滄浪(鳩巢)が「古今大家と称する人の文章を見給へ、平易条暢ならざるはなし。いづれか今人の好める兪州滄溟が文のごとく詭異難浚する事やある。」(駿台雜話卷九、作)といつて、王兪州・李滄溟を駁していることを示せば十分であらう。

北海は、木門の白石・滄浪・南海等について、徂徠と同時にあって明詩の声格があつたと指摘しているものの、護社の先鞭などとは見ていない。先に「室新詩評」を引用して白石が明詩の格調を大いに認めたと論じたが、鳩巢の詩は「秋興八首和老杜韻」と題する八首であり、この中の四首は「停雲集」にも載っている。この四首を「室新詩評」の詩と比較すると、改作後の詩と改作前の詩が混淆している。停雲集には「享保戊戌秋八月」の跋があるから、これより推して「室新

「詩評」は必ずや享保三年以前のものに相異ない。又南海の明詩倡評の著作は享保六年である。従って文献から論ずると北海説のように徂徠の明詩鼓吹とほぼ同時のものである。しかし詩論の唱道は必ずや文献に見えた年代よりも早いに違いない。本稿で私が主張したい事は、木門の明詩主張特に白石は護社に先行し、護社の先鞭となったという事である。

木門の白石と護社との関係を考えると最も結びつき易い立場にあった。先ず木門の学風はその祖順庵が殆んど醇乎たる程朱学者であつたけれども、その学問は偏狭でなく、原念斎が「所謂古学亦先生為之開祖。」(先哲叢談、卷三、順庵条)としている点など木門と護社とは通ずるものがある。其の二は白石の学問は実用功利を旨とし特に制度経済に通じていた点護社に近く、其の三は白石と護社の高弟安藤東野や南郭との関係である。白石と南郭との交友は益田鶴楼の紹介によって興味深く結ばれ(同卷五、白石条)、東野に至っては詩人としての白石を見ることが師の徂徠と同列で、「僕為詩再屈其指二者、一以為先生、再以為白石。」(東野徂徠書簡)というほどであつたからである。

木門の代表者達が活躍した年代を考察すると震沢・順庵は元禄迄、白石・鳩巢は元禄より宝永正徳を経て享保まで、南海・芳洲は宝永・正徳・享保を中心としそれ以後に及んでいるのに対して、護社の代表者達は、元禄時代に活躍したのは徂徠だけで、東野・山縣周南・太宰春台・南郭・高野蘭亭の何れも、享保時代とそれ以降が活躍の舞台であつた。

以上によって木門の明詩鼓吹が護社の先鞭であると主張するのは正鵠を得たものと思う。

これは私だけの意見ではない。蛻巖も亦白石門下の明詩鼓吹を以て徂徠に先行するものと考へたようである。本邦詩壇の変遷を論じて、「元禄中に江戸にて白石先生出られ、専ら唐詩を祖述し、其の入門は

万曆の七才子を学び、是より世上の詩風、漸々にそれへ移りたり。相繼ぎて徂徠先生前の詩風を變じ、是又七才子を主とし、其の門派に上手の作者三四輩出たり。」(答問書卷上、答南海竹田生) といひ、李王の風を慕う詩人達を述べては、「白石先生七才子一派の魁、上手にて候。続いて彩巖先生・徂徠先生・南郭・金華・品川東禅寺の万庵和尚皆名家にて候。」(同卷中、答野氏)と述べている。蛻巖は木門護社の代表者達と同時代に生き、当時の詩豪を以て目せられて居り、且白石とは特別の間柄であり、しかも白石と同様盛唐詩鼓吹の上に立つて明詩の価値を大いに認めた詩人である。知る人ぞ知る、當時に在って親しく聞見した蛻巖の意見は、北海の意見に比してより傾聴するに足ると思う。

六 結 語

以上本稿の論旨は次の通りである。

- (一) 元禄・宝永・正徳を中心として木門によって唐詩が鼓吹され、一世の崇尚が唐詩に向つたこと。(一、三。)
- (二) 木門の唐詩鼓吹は、日本近世詩論史上から観ると、或は唐或は宋或は明というように一時代を畧画して鼓吹しなかつた惺窩・羅山・元政等草創期の詩論が(五のイのa)、丈山・尺五等によって唐詩鼓吹に向つたものを(上同)、木門はそれを承けて唐詩鼓吹派として時代を風靡するに至つたこと(五のイのb)。
- (三) 一方木門からは震沢・白石・南海等明詩鼓吹者が出たこと(四)
- (四) これを詩論史上より観ると二つの意義を持つ。
 - (イ) 羅山や活所によって認識された草創期に於ける李王の古文辞説を承けつぎ、李王等古文辞派の詩文をも貴ぶに至り、明詩を鼓吹するに至つたこと(五のロのa)。
 - (ロ) 白石等の明詩鼓吹は護園明詩鼓吹の先鞭であること(五のロのb)。